様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３７１０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2021
課題番号：１６Ｋ０４５９１

研究課題名（和文）1920～40年代タイの子ども組織ルークスアにおけるナショナリズム教育の変遷

研究課題名（英文）Changes in Nationalism Education in the Thai Children's Organization "Luuk-Sua" between 1920s and 1940s

研究代表者
圓入　智仁（Ennyu, Tomohito）

中村学園大学・教育学部・准教授

研究者番号：００４１３６１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　1911年にシャム（現在のタイ）の国王ラーマ６世が側近の育成を目指して発足させた子ども組織ルークスア（＝ボーイスカウト）は、1913年に学校教育の選択科目となったが、就学率の低さもあってか、全国的に普及したとは言えなかった。1925年に即位した７世王はルークスアを支援し、国内大会の開催や、海外での大会にメンバーを派遣するなどした。その後、1932年の立憲革命後に実権を握った人民党はルークスアを軍事目的に利用した。「ルークスア」は時の為政者が政治的に利用しやすい教育組織であったと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　20世紀初頭のイギリスで始まったボーイスカウトは、瞬く間に世界各国や地域に伝播した。これまでもハンガリーや南アフリカ、香港、日本など各地の活動実践とナショナリズムを関連させた研究が進んでおり、本研究もその一部に位置づけられる。特にタイは国王がナショナリズムを喚起させる「公定ナショナリズム」の代表例として取り上げられることが多いこと，さらに現在に至るまで、タイではルークスアが学校教育に位置づけられていることから、初期のルークスアの実態を扱った本研究の成果は、教育学、政治学、地域研究の発展に貢献できる。

研究成果の概要（英文）：　In 1911, King Vajiravudh of Siam (Thailand) established "Luuksua"(Boy Scouts), an organization for children, with the aim of training his close associates. King Prajadhipok, the successor king supported Luuksua, held Thai National Scout Jamborees and sending some Luuksua members to World Scout Jamborees. Later, the People's Party, which came to power after the Constitutional Revolution of 1932, used Luuksua activities for military purposes. It is believed that Luuksua was an educational organization that was politically accessible to the rulers.

研究分野：教育学

キーワード：子ども　タイ　ルークスア　ナショナリズム教育　ボーイスカウト　ラーマ６世　ラーマ７世　立憲革命

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）　20 世紀初頭の英国に起源を持つボーイスカウトは、子どもが国王や国家に忠誠を誓う組織として、欧米やその植民地、タイや日本などアジアを含めた世界各国や地域に伝播した。タイではルークスア、日本では少年団として導入された。本研究は、ルークスアと少年団などの子ども組織に関する歴史研究の一環である。

（2）　ボーイスカウトとナショナリズムに関する研究の必要性は Sam Pryke が The popularity of nationalism in the early British Boy Scout movement（*Social History*, 23(3), 1998, 309-324）で指摘している。これを踏まえてハンガリー、南アフリカ、インド、香港などを対象とする研究があり、各国や地域の為政者が、その教育組織や教育内容をナショナリズムの涵養に利用したことが示されている。

（3）　ルークスアの通史として、Chaiwat Panyaa のチュラーロンコーン大学提出修士論文（題目の邦語訳は「タイルークスアの発展　西暦 1911-1985 年」, 1986）がある。タイ国立公文書館が所蔵するルークスア関連の公文書と、ルークスアの記念誌に基づいて、年代ごとに出来事を整理しており、事実関係の確認には有用である。

（4）　研究代表者である圓入は、ナショナリズム教育の観点から実証的に、ラーマ 6 世王（1880～1925、在 1910-1925 年）がタイにルークスアを導入した背景と経緯、国王への忠誠心の涵養方法、全国組織の実態、参加した子どもの反応を解明した。また、ルークスア具体的な活動や、軍隊や軍事教練との関連について考察した論考を発表している。

（5）　従来の社会教育学、教育史学、比較教育学の歴史的な研究は、学齢児に関しては学校教育に、青年や成人に関しては学習活動や職業訓練に主たる関心を寄せてきた。このように子どもの社会教育に関する研究が少ない中で、研究代表者である圓入は日本とタイ、沖縄の子どもの組織に着目し、比較を視野に入れて研究を進めてきた。本研究はその一部に位置づけられる。

２．研究の目的

1911 年にラーマ 6 世王が創設した子どもの組織ルークスアにおけるナショナリズム教育の実施体制や教育内容が、政治体制の移行によって、どのように変化し、あるいは継承したのかを実証的に解明する。具体的には、ラーマ 7 世王即位（1925 年）や立憲革命（1932 年）、戦時体制への移行（1940 年頃）によって、従前の政治体制からのルークスアの組織や活動の継承、政治的な思惑、ルークスアにおけるナショナリズム教育の実施体制や教育内容、ルークスアを学校教育に導入した後の教育課程における位置づけ（科目としての対象学年や時間数、課外活動など）の変遷を明らかにする。

３．研究の方法

（1）図書館などでの資料収集と分析

本研究は、ルークスアに関する公文書、ルークスアやタイ教員協会の機関誌、年次報告書、周年記念誌などの史料の収集と分析が中心である。タイ国立図書館やタイのチュラーロンコーン大学などの図書館で資料を収集した。特にルークスアやタイ教員協会の雑誌には、ルークスアに関する主要な公文書、行政関係者や教員の執筆によるルークスアの活動に関する記事などが掲載されている。また、年次報告書は 1910 年代から 20 年代のものを収集した。

（2）関係論文や書籍の入手と検討

1920 年代から 40 年代の、タイの教育史、政治史、ナショナリズム教育に関する史料や先行研究などを収集した。これらを、応募者がこれまでに収集した論文、書籍などのうち、ルークスアの記念誌などとあわせて整理し、それらの内容を検討した。その際、日本やタイで販売されているものは購入し、絶版のものはタイ国立図書館、チュラーロンコーン大学などの図書館を利用した。

４．研究成果

（1）ルークスアに関する主要な雑誌の分析

タイ国立図書館において、子どもの組織ルークスアの機関誌『ルークスア・サヤーム』の 1920 年代から 1938 年までと、タイ教員協会の機関誌『ウイッタヤーチャーン』の 1920 年代から 1950 年までの、ルークスアに関する記事の撮影に取り組んだ。本研究では 1925 年のラーマ 7 世の即位以降を研究対象時期として設定していたが、その前提となるラーマ 6 世の統治期末期の資料についても、比較のために収集が必要と判断した。

『ルークスア・サヤーム』は 1938 年以降の冊子がタイ国立図書館には残っていなかった。ル

ークスアの組織改編などの理由により、発行されなくなったと思われる。また、『ウイッタヤーチャーン』は、1920 年代は月に 2 号が発行され、ルークスアに関する記事がほぼ毎号で掲載されていた。さらに、頻繁にルークスアに関する統計も掲載されており、教員協会としてルークスアを重視していたことが推測できる。ところが、1925 年にラーマ 6 世が崩御し、弟のラーマ 7 世が即位すると、ルークスアに関する記事は減っていったことが明らかになった。

その後、1932 年の立憲革命を経てもルークスアは引き続き学校教育に位置づけられていたが、『ウイッタヤーチャーン』におけるルークスアに関する記事はさらに減り、第 2 次世界大戦下では、ルークスアに関する記事は無くなった。

（2）その他の雑誌や書籍の入手と分析

他にも、本研究の対象時期に発行されていた、関わりのありそうな雑誌の内容を可能な限り確認した。その中に、『ウイッタヤーサーン』の合本３冊があった。３冊になっているが、内２冊と、他の１冊は発行時期がずれていることと、内容に違いがあるため、別物であると判断した。いずれも、ルークスアに関する記事は見られなかった。

『ナックリアン・タイ』という雑誌も確認したが、外国語学習のための雑誌のようであり、本研究には関係なかった。『ナンスーピム・ナックリアン』は、副題に「男女生徒とルークスア全員のための冊子」とあり、ルークスアに関する記事をいくつか確認できた。以上により、タイ国立図書館における、本研究に関連すると思われる雑誌の収集は一通り、終えることができた。これらの雑誌からも、7 世王期以降は年を追う毎に、ルークスアの組織や活動に関する記述が減っていることが確認できた。

タイ国立図書館が所蔵する、雑誌以外の関連書籍の写真撮影も行うことができた。『ボーイスカウトのゲーム』（1923 年）、『戦時下におけるボーイスカウトの有用性』（1926 年）、『スカウトとの対話』（1927 年）、『ボーイスカウトの偵察、性質』（1943 年）など、ボーイスカウトの規則に関する書籍類である。

タイのチュラーロンコーン大学図書館では、本館の開架書籍、希少本書庫（Rare Books）における書籍、教育学部図書館の開架書籍の他、教育課程研究室、青少年関連書籍コレクションの蔵書を、それぞれ確認した結果、いずれもタイ語書籍の『7 世王とルークスアの歴史』（1961 年）、『タイ王国ルークスアの中央会議資料』（1915 年）、『タイのルークスアの百科事典』（2011 年）、『6 世王時代のスアパーとルークスア』（1971 年）などの本を発見し、必要部分を写真撮影した。

（3）1910 年代から 20 年代のルークスアの年次報告書の検討

1910 年代から 20 年代のルークスアが発行していた年次報告書に基づき、そこで報告されている統計情報の検討に取り組んだ。検討した年次報告書は、これまでに入手した第 1 号（仏歴 2459 年、おおよそ西暦 1916 年）、第 3～5 号、第 9 号、第 11～14 号（仏歴 2472 年、おおよそ西暦 1929 年）であり、それぞれが 400 ページに及ぶものである。

この報告書には、国レベルでのルークスアの組織の動きをはじめ、各州レベルにおけるルークスアの活動に至るまで、かなり具体的な内容が記載されている。例えば、どの州のどの地域に、新しい組織が結成されたのか、そこには、それくらいの参加者がいるのか。あるいは、子どもや大人の参加者の中で、階級が上がったのは個人名を含めて、どのような人物なのかといった紹介もある。さらに、各州で活動している個別組織の、１年間の活動の概略なども記されている。また、どの州で何人の子どもや指導者が登録されているのか、それは前年比でどれくらいの増減があるのか、子どもや指導者が、設定されている階級のどこに何人が到達したのかといった報告もある。その他、各州レベルの組織における、金銭的な収支の報告もある。

以上のことが克明に報告されている資料を本研究の成果報告書としてまとめ、オンラインで公開している。この資料を活用することで、バンコクをはじめとして、各州におけるルークスアの活動の盛衰を、把握することができると考えている。

従来、ルークスアはラーマ 6 世がイギリスのボーイスカウトを導入する形で発足し、学校教育に組み込まれて子どもたちへのナショナリズム教育に大きな役割を果たしたとされてきた。これらの統計を同時代の国勢調査などを用いながら検討することでで、ルークスアを通したナショナリズム教育の普及の実際を把握することができると考えている。

（4）1910 年代から 1940 年代のルークスアの変遷

1910 年代から 40 年代のルークスアの位置づけについて、以下のことが明らかになった。

1911 年に当時のラーマ 6 世王が側近を養成するために創設した「ルークスア」を、1925 年に王位を継いだラーマ 7 世王も存続させた。存続の理由として、ルークスアがボーイスカウトという世界規模の組織の一部であることや、7 世王自身が王としての求心力を高める思惑を持っていた可能性がある。1929 年には 3 回目となるボーイスカウトの国際大会にタイ人を派遣し、1931 年には国内で指導者養成を本格的に開始した。

1932 年の立憲革命後、ルークスアは海軍の将官が長を務める、教育省体育局の所属として存続した。翌年には体育局の下にルークスア課、海洋ルークスア課、訓練課がそれぞれ設置された

その後も 1930 年代は、主に留学生が海外のボーイスカウトの国際大会に参加していた。
1943 年、ユワチョンタハーン（青少年義勇軍）に関する法律の成立により、ルークスアは徐々に、国防省管轄のユワチョンタハーンに改変され、財産も移管された。

（5）諸外国の「ボーイスカウト」にはない、タイの「ルークスア」の特徴

1913 年、ルークスアが小学校や中学校の選択科目となった。この後、現在に至るまでボーイスカウトが学校教育の教科として位置づけられている国は、タイの他に知られていない。また、1921 年には中期中等教育 3 年間の必修化を含め、初等から中等教育の期間で選択あるいは必修科目となった。

戦前日本の少年団には、通常の少年団に加えて、海洋に特化した海洋少年団が存在した。校舎は英語圏では Sea Scout と称しており、欧米各国でも見られた活動である。イギリスでは第 2 次世界大戦下において Air Scout も発足した。

他方、タイでは 1910 年代から漁師・猟師隊、技術隊、消防隊、看護隊、海洋隊、騎馬隊、信号隊が発足した。これら特別な活動に特化したタイの存在は諸外国には見られない。ただし、これらの特別な活動に特化した隊の数は、全体の数%であった。

世界的なボーイスカウトの特徴として、自らが獲得した知識や技能によって「記章」を得る仕組みがある。戦前の日本では（あいうえお順に）案内、石工、印刷、園芸、沿岸監視、音楽、開拓、革細工、籠造、家畜などの 63 種、アメリカでは（アルファベット順に）農業、畜産業、アーチェリー、建築学、美術、天文学、体育実技、自動車運転、航空術、かご細工など 99 種が設定されていた。他方、同時期のルークスアでは竹藤編み、大工、縫工、鉄製器具使用、初級機械工、初級船舶操縦、結索、旋盤工、果樹園管理、織工、稲作の 10 種のみであった。職業に直結するものが中心であり、日本やアメリカのように趣味やスポーツに関するものはみられない。

また、タイにおけるこれら 10 種の知識や技能を獲得したことを示す「記章」を授与されたルークスアは、仏歴 2472 年（西暦でおよそ 1929 年）までの延べ人数で 139 名であった。仏歴 2472 年現在で 5 万人を超えるルークスアの加盟員がいたにもかかわらず、この数字であったことが何を意味しているのか、今後の検討課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 圓入智仁
２．発表標題 タイのボーイスカウトの起源とナショナリズム　―ラーマ6世（在1910-1925年）に注目して―
３．学会等名 九州教育学会ラウンドテーブルⅡ「グローバリゼーションと教育　―子どもの規律と自律―」（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 圓入智仁
２．発表標題 20世紀前半のタイにおけるスカウト活動 ―政治体制の転換の影響に着目して―
３．学会等名 ボーイスカウト日本連盟　令和元年度　全国大会　スカウティングエキスポ
４．発表年 2019年

１．発表者名 圓入智仁
２．発表標題 ボーイスカウト運動の始まり ―1910～30年代の日本とタイ、1950年代の沖縄の比較試論―
３．学会等名 インド太平洋研究会2月例会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

圓入智仁『1920～40年代タイの子ども組織ルークスアにおけるナショナリズム教育の変遷　(16K04591)　2016～2021年度　科学研究費　基盤研究（C）　成果報告書』2022年3月、https://tomoennyu.wixsite.com/website、全158頁。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関